
紅蓮の聖女

美古都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の聖女

【Nコード】

N5270U

【作者名】

美古都

【あらすじ】

行方不明になっていた兄の声に導かれ、異世界に渡った女子高生の理奈。そこは魔物との戦いが続く危険な場所だった。それでも兄がこの世界にいるかもしれない。理奈は出逢った人たちの手を借りて、兄の消息を探す決意をする。けれど彼女には、魔物を一瞬で消し去ることの出来る聖なる力が宿っていた。

以前掲載していた同名の小説の改訂版ですが、ストーリーは大幅に変更しています。

異世界（１）

空を紅蓮に染め上げている夕陽は、ゆっくりと沈もうとしていた。もうすぐ七月。

陽が空高く昇っていた頃は、もう息も付けないほどの暑さだった。けれど日が傾く頃には、少しずつ気温が下がってきたように感じる。湿気を含んだ風が肌を撫でて吹き抜けていく。雨が降るのかもしれない。

（傘持っていない……。というか、この状態じゃ持っても差せないし）

中村理奈は、紅く染まる町の中を、空を見上げながら両手に荷物を抱えて足早に歩いていった。

背まで伸びた黒髪は、真っ直ぐなストレート。小柄だが日に焼けた肌は健康そうで、黒目がちな大きな瞳も元気そうにくるくるとあちこちを見ている。

その右手には、教科書や弁当箱が入った学校の鞆。左手にはスーパーで買い物をしてきた食料品。なるべく重い物は避けてきたが、両手に荷物を持っていると急いで歩くのもなかなか大変だ。ふうふう言いながら歩いていると、すれ違った女子高生のグループが声を掛けてきた。

「あ、理奈。これからカラオケ行かない？」

仲の良いクラスメートたちだった。

週末という開放感からか、どの顔も晴れやかだ。

「この荷物じゃちょっと無理かも」

可愛らしい黒猫がプリントされたエコバッグを掲げると、誘った友人が何かに気付いたように、あ、と小さく呟く。

「ごめん、お母さんまだ入院してるんだっけ」

「うん、そうなのよ。また今度ね」

「ごめん、と更に言い掛ける友人に明るくそう告げて、よいしょ、

と荷物を持ち直して歩き出す。

「またねー」

物心がついた時から、父親はいなかった。

母と兄との三人暮らし。あまり贅沢は出来なかったが、それでもそれなりに楽しく暮らしていた。

突然、兄が姿を消すまでは。

事故なのか、何か事件に巻き込まれたのか。それとも自分の意志なのか。

一年経つてもその消息はまったく掴めず、元々の身体の弱かった母は心労もあつて倒れ、ずっと病院に入院したままだった。

けれどいつかは、母も兄も帰ってきてくれる。また三人で仲良く暮らせる日がきつと来る。

そう信じて、理奈は学校が終わると毎日、制服のままバイトへと急ぐ。家賃と母の入院費の支払いの為だ。それがいつもの日常。けれど金曜日になってくるとさすがに疲れを感じてくる。

「ふう、重かった。やっと着いた」

アパートに着く。鞆から鍵を取り出し、よいしょ、と荷物を先に入れて郵便受けを見る。

ワンルームの、殺風景な部屋。年頃の少女らしい可愛らしい雑貨などひとつもない。ベッドと、テレビと、そして机があるだけだ。制服を脱いで着替えをして、買ってきた食品を冷蔵庫に入れる。そしてテレビをつけた。明るい笑い声がテレビの中から聞こえてくる。ほんの少しだけ、孤独が紛れる瞬間だった。

母と兄と三人で暮らしていた家は、もう手放してしまった。

兄が失踪し、母だけでは住宅ローンを支払うことが出来なかったのだ。理奈も必死にアルバイトをしたが、高校生のバイト代だけではどうしようもなかった。思い出の場所を失ったのは寂しいが、今は生活していくだけで手一杯だった。

テーブルに宿題のプリントを広げ、目を通しつつサンドイッチを頬張る。自炊の方が経済的だが、金曜の夜だけは弁当ですませた。

一番疲れている時くらい、家事から解放されたかった。

それほど疲れていても、やはり金曜の夜は気分がゆったりとする。ポットからお湯を注いでインスタントコーヒーを作った。コーヒーの香りが部屋の中を漂い、気持ちをしりラックスさせてくれる。

土日は休みなのだから、宿題などは明日やればいい。けれど、土日は一日バイトが入っているから、慌てて日曜日にやるよりも金曜の夜にすませる方が後で楽だ。シャープペンをくるくると回しながら、数学の問題と格闘する。その時、携帯電話がメールの着信を知らせた。なにげなく手に取った、その時。

「ん……？」

理奈は、家の中に僅かな違和感を覚えて手を止めた。

ひとり暮らしに慣れると、気配には敏感になる。カーテンを閉めている東側の窓。違和感はそれから発せられているように思えた。

（違和感っていうか……人の気配？）

けれどここはアパートの二階だ。窓の外に人が立っている筈がない。今まで聞いたことがある様々な怪談話が頭の中を駆け巡り、理奈は、その気配を綺麗に無視する事に決めた。

（よくホラー映画とかでさ、危ないって言われてる場所にわざわざ行く人がいるけど、あれはひどい目にあっても仕方ないよね）

危険だとわかってるのに、行く方が悪い。

そう結論をつけた理奈は、宿題のプリントに意識を集中させる。

「んー？ 何これ、メンドクサイなあ、もう……」

文句を言いながらもちらりと窓へと視線を走らせた。気にしない、と思っただけでもやはり気になってしまふ。違和感はまだ消えていなかった。

（気になる。でも無視、無視……）

「り……な……」

けれど彼女の固い決意は、窓の奥からかすかに聞こえてきた声によつてあっさりと崩れ去った。

会いたくて、ずっと聞きたかった懐かしい声。

「え？ 今の声……。お兄ちゃん？ お兄ちゃんなの？」

アパートの二階。窓の外に生きている人間がいる筈がない。
そうわかっていたはずなのに。

懐かしさと、そして今までひとりで頑張ってきた心細さにたまら
なくなり、慌てて窓へと駆け寄る。

勢いよくカーテンを開けた。

異世界（2）

「お兄ちゃん？」

けれどそこに兄の姿はなく、ただ無限に広がっているかのような濃い闇だけが存在していた。深淵の闇は、まるで理奈を飲み込もうとするかのようにじわりと近寄ってくる。

「や、やだ……」

ぞくりと背筋が冷たくなった。堪えきれない恐怖に、固く瞳を閉じる。無意識に顔を庇うように手を掲げていた。だが闇は容赦なく、理奈を包み込もうとする。

「こないでッ！」

何かが、自分の内側で弾けるような感覚。

それはあの夕焼けのような、紅蓮。

炎が闇を灼く。

急激に意識が遠ざかっていった。理奈はそれに逆らう事が出来ずに瞳を閉じる。

——会いたい。

理奈の頬を涙が流れる。

（……夢でも何でもいい。もう一度、会いたいよ、お兄ちゃん）
涙がゆつくりと頬を伝う感覚。それが意識を手放す最後の瞬間まで、理奈に残されていた。

どのくらい、意識を失っていたのだろう。

理奈は、乾いた土の感触と眩しい陽射しで目を覚ました。そっと瞳を開くと、緑色が視界いっぱいに広がっている。

（……身体が、重い……）

思うように動かない。身体を起こしたものの、あまりの倦怠感に

立ち上がる事は諦め、理奈はそのまま膝をついて座る。

（ここは何処だろう……？）

見上げると、高い空。

太陽は眩しく輝き、周囲は、一面の草原。目を開けた時に見たあの緑色は、この草の色だったのだ。

「私、何を……してたんだっけ」

今まで何をしていたのか、思い出せない。ただ激しい疲労感が身体を支配している。

何故、こんな草原の中で眠っていたのだろう。座ると周囲が見えないくらいに生い茂った草の中だ。すぐにでも立ち上がり、この場所が何処なのか確かめたい衝動に駆られながらも、疲労しきった身体は思うように動かない。理解出来ない状況から身を隠すように、草の中に蹲り必死に直前までの状況を思いだそうとした。状況が把握出来ない恐怖は、ゆっくりと足元から這い上がってくる。そして自分が簡単な部屋着のままだと、今更気が付いた。普通のＴシャツに、膝丈のスカート。財布も携帯電話も持っていない。

風が吹き、長い草が揺らめいてざわざわと音を立てる。焦燥はますます濃くなり、理奈は瞳を固く閉ざして、両手で耳を塞いだ。

（どうしてこうなったのか、考えなきゃ）

届かない糸を掴むかのように、必死に記憶を辿った。

学校の帰りにいつものようにアルバイトをして、それからスーパーで買い物をした。

いつもと変わらない日常だった筈だ。

（その後に宿題のプリントをやっていたんだよね。……それから？）

どんなに必死に考えても、その後の記憶が蘇ることはなかった。だがいつまでもこのまま瞳を閉じている訳にもいかない。逃げたからといって問題は何ひとつ解決しないことを、理奈は今までの経験からよく知っていた。

そうして瞳に映ったのは、やはり緑色の草原。

「そのうち思い出すかもしれないし……。とにかくここが何処か調

べないと」

声に出してそう言う。重い身体を無理矢理起こし、丈の長い草の上に顔を出した。

見えるのは、ただ広がる草原。

地平線というものを、初めて見た。必死に目をこらして四方に視線を巡らせると、東側の奥には森林らしきものが見える。他の場所には延々と広がる草原しか見えなかった。理奈はひとまずその場所を目掛けて歩き出す。森へ入るつもりなのではない。ただ、歩き出すのに目印が欲しかったのだ。

「朝になつてゐるってことは、今日何曜日なんだろう。バイト、大丈夫かなあ……」

重い足を引き摺りながら、ひとり呟く。学校よりも仕事の方が心配だった。学校ならば多少休んでも平気だが、バイトは首になどなったら生きていけなくなる。

そうしてしばらく歩いていた理奈だったが、ふと違和感を感じて立ち止まった。

（何だろう。今、なんかすごく嫌な感じがした……）

ぞくりと背筋を這い上がる悪寒。

悪意を持った何かが、じつとこちらを見据えている。その悪意の強さに、恐ろしさに理奈の足は完全に止まってしまふ。逃げ出さなければ、と思うが、疲れ切った思考と身体は、容易に動かす事は出来なかった。

草が揺れる。

何かが、こっちに向かってきている。理奈は、その方向を凝視した。見たくないのに、視線は、まるで縫い止められたかのように動かない。

草の中から見える、紅い瞳。

ぎらぎらと輝くそれが、射抜くような鋭さで理奈を見つめている。

現れたのは、狼に似た形の生き物。その姿はまるで影のように、ゆらゆらと揺らいでいる。

けれど間違いなく、漂う殺気。間近に迫った恐ろしさに、足が震えた。

「や……やだ、こっちに來ないでよ……」

身を守る武器など何も持っていないかった。狼に似た影は唸り声をあげて理奈の様子をうかがっている。理奈は身の危険を感じ、咄嗟に走り出す！

けれど歩き疲れた足で、追う獣から逃れる事は不可能だった。

異世界（3）

跳躍する獣の気配。

右肩に激しい痛みを感じて、理奈は前のめりに倒れた。
血の匂いがする。

（そうだ、私、お兄ちゃんの声聞いたんだ……）

その痛みに、瞬時に昨日の記憶が甦る。

あの時、確かに理奈は兄の声を聞いた。

もう二度と、聞けないと思っていた。

涙が出るくらい、懐かしく。恋しい声。それが確かに聞こえたのだ。

此処が何処なのかはわからない。けれど、もしかしたら兄がいるのかもしれない。

（お兄ちゃんにもう一度、会えるかもしれない……）

その想いは強く、とても強く理奈を突き動かした。

こんな所で死ねない。もう一度、兄に会うまでは。

肩の激しい痛みを無理やり押さえつけて、理奈は立ち上がった。

獣の鋭い爪で切り裂かれたようだ。

武器はない。けれど理奈は強い意志で立ち上がり、獣を睨み付けた。

「絶対に、絶対にお兄ちゃんを見つけるんだからっ」

その場に落ちていた枯れ木を気にする。武器にもなりそうにない、弱々しい手応え。けれどそれを、間近に迫った手にした獣の赤い瞳に思い切り突き立てる。手に伝わる感触に背が震える。流れる血に、悪寒が走る。

けれど理奈は、決して瞳を閉じなかった。

獣は身を擦って理奈を投げ飛ばした。その勢いに、理奈の小柄な身体は振り飛ばされて転がる。

「痛っ……」

「伏せて」

転がり傷の痛みに顔をしかめた時、そんな声が聞こえた。

理奈は無意識にその声に従い身を伏せる。

闇を切り裂く、銀の刃。

音はなかった。

まるで煙が蒸発するように、銀色をした剣に切り裂かれた闇の姿をした獣の姿が消える。

「大丈夫か？」

気遣うような、優しい声がした。

人がいた。

助けて貰った。

安堵から、縋るようにその声の主を見上げる。

（うわ……）

まるで闇を払うかのように銀の刃を振り、彼が振り向いた。

空高い陽射しに反射して輝く、長い金色の髪。腰まで届きそうな長さのそれは、背中 of 辺りでひとつに束ねられている。そして先程の草原のような深い緑色の瞳。裾の長い、まるで軍服のような服装。そして手には先程の剣を持っていた。けれどその姿よりも、あまりにも整った見事な容貌に目を奪われた。

（綺麗なひと……）

「酷い怪我だ。すぐに手当をしよう。歩けるか？」

少し低い優しい声だった。差し伸べられた手に、理奈は警戒もせず手を伸ばす。

「い、痛っ……」

途端に肩に激痛が走る。傷を負った肩が燃えるように熱い。

「ああ、無理なくていいよ」

ふわりとした浮遊感。気が付くと理奈は、彼に抱き上げられてい

た。

「あの、わ、わた、わたし重いですから……」

綺麗な顔が間近にある。真っ赤になって慌てて降りようとするが、力強い腕はびくともしなかった。

「もう心配ない。大丈夫だから」

理奈に語りかける彼の声は、何処までも優しくかった。その優しさが、張り詰めていた理奈の心を解きほぐす。先程の獣と対峙していた恐怖を思い出し、思わず瞳に涙が浮んだ。

人前で泣いたことなど無かったのに。

理奈は会ったばかりの男性の胸にしがみつき、いつの間にか声を上げて泣いていた。彼はもう何も言わず、理奈が泣き止むまで優しく抱いてくれた。

(……恥ずかしい)

彼の腕に抱かれたまま、草原の中を移動していく。見たこともないほど綺麗な顔をした男性の腕に抱かれているのも、見知らぬ人の腕の中で泣きじゃくってしまったのも恥ずかしい。理奈は真っ赤な顔をしたままだ空を見上げていたが、ふとあることに気が付く。

(金髪……。ってことは、ここは日本じゃないの?)

言葉が通じているので、不思議に思わなかった。何よりも彼のあまりにも見事に整った容貌は現実離れしていて、まるで映画の中にもいるような錯覚を感じていたのかもしれない。

「キルランド様」

彼に尋ねてみよう。そう思った時、ふと柔らかな女性の声があった。気が付くと、永遠に続くかと思われた長い草原の終わりが見える。そして先程の声の主であろう女性が立っていた。

色素の薄い、ほとんど白のような水色の髪。そして蒼い瞳。線が細くて儚げな女性だが、その瞳は強い意志を宿しているように見える。

「ユリアンヌ」

ちようどよかった。理奈を抱きかかえていた彼は、彼女を見てそう言う。

「魔物に襲われて怪我をしていたんだ。治療してやってくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5270u/>

紅蓮の聖女

2011年7月2日14時08分発行